

Life is Beautiful Good!



「花園町のよしみちゃん—洞穴に住んでた女の子」

Spring of Love and hope

はじめに

このお話はフィクションです。登場人物名やその家族背景は実在する人物のものではありませんし、作者の家族背景ではありません。ですが、主人公が、「ブラウンさん」、「みどりさん」、そして花園町の人々から受け取った愛と希望は、ホンモノです。

このお話を、わたしが長い人生の回復の旅路を歩んでいたとき、わたしにとっての「ブラウンさん」「みどりさん」となってくれ、わたしに愛と真実を見せてくれた、尊敬する狭山心理研究所の服部雄一・みどり夫妻に捧げます。また、本当の自分と人生を取り戻すために、勇敢に旅を続けている人たちに、贈ります。(ぜったいに、あきらめないで！例えあきらめなくなっても、神さまの方であなたをあきらめないから、大丈夫だよ)

そして、いつも本当のわたしだけを見て、愛し、支え、「人生っていいものだ」ということを教えてくれた、最愛の夫へ。ありがとう。

最後に、わたしの人生のストーリーを、わたしと一緒に書いてくれている、天のおとうさんである神様。わたしの人生は、あなたが愛であることの証明です。あなたと共に生きる人生は、毎日が喜びと発見で満ちています。

人生って、すばらしい。

2021年6月

作者

目次

1 花園町のよしみちゃん

2 ブラウンさんのおはなし

3 洞穴の子が「よしみちゃん」になったわけ

4 おわりではじまり



1 花園町のよしみちゃん

洞穴にすんでいた女の子をしますか？ブラウンさんのすんでいる花園町には、昔、洞穴にひとりですんでいた女の子がいます。「3丁目のよしみちゃん」といえば、だれでもわかってくれますよ。よしみちゃんは、もう大きな女の子で、かわい
い白い小さなアパートに、黒白のはちわれ猫のクート、小鳥のピーとくらしています。
月曜日から金曜日、朝から3時まででは町のケーキ屋さんで、いちごのつたまっしろ
なショートケーキや、あかいゼリーのつた克蘭ベリームースや、かりかりのシュ
ーに、きいろいクリームをたっぷりつめたシュークリームを売っています。ケーキ屋さ
んのいつかにはカフェもあるのです、おなじみのお客さんに、あつあつのコーヒーや、
とくせいハーブティーをだしながら、たくさんお話しをするんです。花園町には、毎
日いろんなことがおきるんですからね！ 3時になると、よしみちゃんは、ケーキ屋
さんをマスターのこうじさんにまかせて、自転車をシャーンとこいで、散歩にかけ
ます。花園町は小さな海辺の街です。あんまりちいさいので、地図にもものつていま
せん。でも、お店がいっぱいあって、すてきなお庭のおうちがならんでいて、それはそ
れはいいところなんです。

散歩の最後に、よしみちゃんは、くだり坂をシャーンと自転車でかけおります。坂
のむこうには、青い青い海がやさしく笑っているんです。海は、天気の良い日には濃
い青色をしていて、曇りの日には白っぽいグレイで、雨の日には、突然怒ったように
波をたてます。毎日がう顔をしている海が、よしみちゃんは大好きでした。下り坂
をおりて、海を左手に十分くらいはしって、赤い屋根のクリーニングやさんを右にま
がって、また坂道をのぼっていくと、梅の花のにおいがぷーんとしてきます。赤い梅
と黄色い梅が咲いているお庭が見えたら、そこは、ブラウンさんのおうちです。よし
みちゃんは、いつもブラウンさんちでお茶をよばれて帰ります。よしみちゃんはいつ
も、ちいさなおみやげをもってくるのですが、今日は、よしみちゃんが発明した、キ
ビ砂糖とゴマのクッキーが、かさかさ袋のなかで音をたてています。それに、マスタ
ーのお母さんがわけてくれた、黄色いチューリップもリボンで結んでカゴにはいって
いました。

「よしみちゃん、よく来たね！」ブラウンさんおくさんのみどりさんが、お庭で待
っていました。ラベンダー色のセーターに、ジーンズ、ショートヘアにおおきなイヤ
リングをゆらししています。みどりさんにみつめられると、なんだから、あつたかくて、
ちよつとはずかしくて、涙がでそうになってしまいます。きつと、世界で一番の暴れ
ん坊がきたとしても、みどりさんに「よく来たね！」っていわれたら、ちっちゃい男
の子みたいになっちゃうんじゃないかな？って、よしみちゃんはいつも思います。

「みどりさん、はい、これチューリップとクッキーね。あたし、自転車とめてすぐ
いくー！」

「はいはい、ブラウンさんも待っていますよ」

しばらくしてよしみちゃんがいくと、ブラウンさんのおうちのダイニングルームでは、すっかりお茶のしたくができていました。レースのテーブルクロスの上には、バラのお花がらのティーカップが3つ、真ん中には、きれいにいけられた黄色いチュールリップと、まつしろのメレンゲがたっぷりかけられた、レモンパイがのっています。「わあ！ 今日は何のおいしい？」よしみちゃんはうれしくて、目が三倍くらいにおおきくなりました。

「よしみちゃん、今日はよしみちゃんの記念日じゃないか。洞穴から見つかったね」ブラウンさんがにつこり笑っていました。ふるびた茶色いジャケットをきて、同じ色の眼鏡をかけています。その眼鏡の奥からは、よしみちゃんのだいすきな水色の、湖みたいな目がのぞいていました。

「もちろん、覚えてるわよ。でも、すんごく昔みたいに思えるね。なんだか、ずっとずっと昔におきたことみたいなの……」よしみちゃんは、ちよつと遠くのほうをみてから、ブラウンさんをみつめました。昔のことを思い出そうとしたとき、一瞬、さーっと、風がふいたみたいなきもちがしましたが、でも、ブラウンさんの目を見ていると、じーんと、あたたかい気持ち湧いてきて、そして、あたしはもう、花園町のよしみちゃんなんだわ、と、頭から足のさきまで、力がわいてくるようでした。

「でも、素晴らしい十年間だったわね。私たち、あなたが洞窟から出てきてくれて、こんなにすてきな女性になって、とつてもうれしいわ」みどりさんが、じーつとよしみちゃんをみて言いました。ブラウンさんの深い青い目も、よしみちゃんを優しく見つめています。

「ねえ、ブラウンさん、あたしをみつけた日のこと、はなしてよ」よしみちゃんは、レモンパイを切り分けながら言いました。



2 ブラウンさんのおはなし

そう、よしみちゃんが、「花園町3丁目のよしみちゃん」になる、ずっとずっとまえ、よしみちゃんには名前もなくて、洞穴に住んでいました。洞穴って、真っ暗で、じめじめしていて、夏でもひんやりしているの、知ってましたか？それなのに、どうしてよしみちゃんは出てこれたのでしょうか？それは、ブラウンさん夫妻が見つけてくれたからなのです。

その日、ちょうど十年前の、小春日和の2月のある日、ブラウンさんは、いつものように、「そのその山」へ「しよくぶつさいしゅう」へでかけました。「しよくぶつさいしゅう」って、いろいろなめずらしい草や花をあつめるんです。ブラウンさんは、ほんとうはお医者さんで、おうちのすぐとなり、おなじ敷地に「ブラウン診療所」があるんです。でも、患者さんがいない日は、診療所は十二時でしめてしまい、毎日お山へでかけるのです。

「あなたはお医者さんなのか、登山家なのか、あたし時々わからなくなっちゃうわ」ブドウのつるであんだカゴをさげたみどりさんも、今日は一緒です。みどりさんは、秋や冬は、ツルや枝、木の実や色づいた葉をつかって、春や夏はうつくしい花で、いろいろなものをつくる「ゲイジュツカ」でもあるので、その材料をとりに来たのです。

「ああ、ぼくはこうしてお山にいるときがいちばん好きだなあ。ねえ、みどり、海のそばじゃなくて、お山の中に診療所をつくろうか？」ブラウンさんは、ピンクいろのほつぺをにかつとあげて、言いました。

「あなた、こんなお山に診療所をつくったら、患者さんはタヌキさんかキツネさんばかりよ」

「それはちよつとこまるなあ。きつとお代はドングリだろうねえ」ブラウンさんは頭をかきました。

「おや？」

そのときです。お山の奥のほうから、かすかな鳴き声がかこえたようなきがしました。

「……エーン……」

「みどり、きいたかい？」

みどりさんも、はつとして立ち止まりました。

「……エーン……」

空耳ではないようです。

「まいごかしら？」

ふたりは、声がするほうに急いでのぼっていきました。声は、道からはずれたふかい藪の方からかこえます。ブラウンさんがもっていた杖がわりの木の棒で、藪をかきわけ、かきわけ、すすんでいくと、少し開けた林へでました。あたりは、立ち並ぶ木のせいで薄暗く、地面は枯葉で覆われています。

「あれを見てごらん！」

ブラウンさんが指をさした先に、小さな祠がありました。まるい小さな岩にゴヘイと綱がまかれています。

「あ！」みどりさんが叫びました。

「祠のうしろを見て！洞穴がある！」

入口が石でほとんどふさがれているのでよく見ないとわかりませんが、すきまができています。

「あそこから声がするみたいだぞ！」

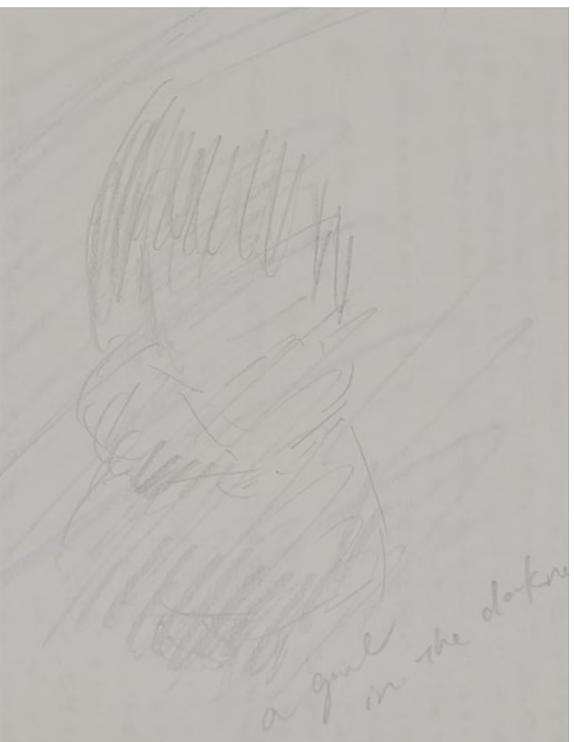
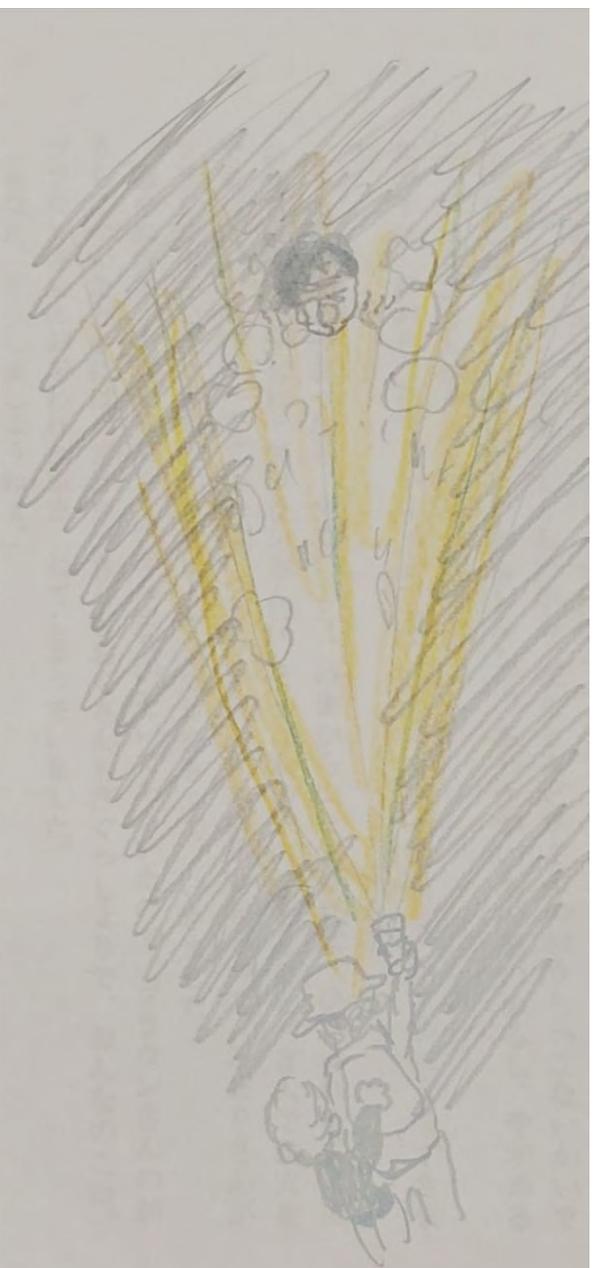
ブラウンさんは急いで入口の石をとりのぞきました。中は暗くてよくわかりません。ナップサックにいれてあった懐中電灯で中を照らします。

「おーい！だれかいますか？」

ブラウンさんの懐中電灯の先に、なにかがうずくまっています。

「・・・エーン・・・」

「こどもだわ！」みどりさんが、はっと息をのみました。ぶるぶるふるえた女の子が、うずくまっています。年は五歳か、六歳くらいでしょうか。すっかりおびえているようです。



かけようとするみどりさんをそつとめて、ブラウンさんは話しかけました。

「どうしたの？まいごかな？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

返事がありません。ブラウンさんは、やさしく、ゆっくり、つづけました。

「ぼくは、ブラウンさんだよ。おいしやさんなんだ。おくさんの、みどりさんもいっしょだよ。きみをたすけたいんだけど、そっちへいってもだいじょうぶ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

女の子は、肩をびくつとふるわせて、ますますふせてしまいました。

「・・ずいぶんとこわいめにあつたみたいだねえ。それに、こんなくらいところにひとりぼっちで、どんなにさみしかったろうねえ」

ブラウンさんは、懐中電灯が女の子の足元だけにあたるようにして、せまい洞穴の中にそつとすわりました。みどりさんもだまってすわります。

「こわかったら、むりして話さなくていいんだよ。ぼくたちはね、あなたをきずつけたりしないよ。あんしんしていいからね」

そういつて、ブラウンさんはしばらくだまりました。

「・・くしゅん！」女の子がくしやみをしました。

「あらあら、たいへん！この子、さむいんじゃないかしら」

みどりさんが、カゴの中からあかいコップがついた水筒をとりだしました。

「これ、ココアよ。のんでごらんさい。あつたかくて、あまいの。」

女の子にそつとさしだします。

「・・・・・・・・つくくん・・・・・・・・つくくん・・・・・・・・つくくん」

最初はほんのちよつぴり、でもすぐに、ごつくんとのみほしました。

「あら、もつとのみたい？」

女の子はうなずきます。みどりさんは、もういつぱいついであげて、それから、まいていたあつたかい糸糸のシヨールで女の子のかたをくるんであげました。

「どうだろう、ここは寒くてくらいから、ぼくとみどりさんのおうちへこないかい？だれもこわい人はいないから、あんしんして、あつたかいものをのめるし、やすめるよ」ブラウンさんがやさしく言いました。

女の子は、おおきな目でじいーつとブラウンさんを見つめると、かすかにうなずきます。

「さあ、そうときまったら、すごいこう。いまから山をおりれば、ひがくれるまえにおうちにつけるからね」ブラウンさんは、そつと女の子のをとると、3人で洞穴をでました。あなの外へでてからは、ブラウンさんが女の子をおぶって、みどりさんがブラウンさんのナップサックをしょって、カゴをもって、いききました。

藪をぬけて、山道をくだって、あんまりいそいであるいたので、ブラウンさんのおうちについたときには、ブラウンさんもおくさんも汗ぐっしよりで、おんなのこは、ブラウンさんにおぶわれたまま、ねてしまっていました。

「あなた、どうしまししょうねえ。」

「うん。とにかく、この子を介抱してやろうね。花園警察署のノブさんにはわたしから連絡しておくから、みどりは、この子の服をかえて、しんりようじよのベットにねかせてあげてくれないか」

「こんなにかわいい子だもの。きつとげんきになって、おうちに帰れるわよね」

みどりさんは、ブラウンさんからおんなのこをうけとると、そつとだきしめました。

でも、その子のおうちはなかなか見つかりませんでした。花園警察のノブさんや、花園町の蝶々さん、もつとエライ人も、近所のおじさんも、おばさんも、みんな、一生懸命に探してくれたのですが、五歳か六歳の女の子を探しているお父さん、お母さんはひとりもいなかったのです。そこで、女の子は当面、ブラウンしんりようじよにいて、女の子がおちついて話ができるようになるまで様子を見守ることにしました。女の子は、二週間、ひとことも口を利きませんでした。大きなくらい目で、じーつとブラウンさんとみどりさんを観察して、「どうしたの？」と優しく声をかけられると、ぼろぼろ泣きました。

「よっぽどひどいめにあつたみたいだな。すこしずつ、信頼してもらうしかないね。ブラウンさんは、ほっとため息をつきました。

「なにか、あの子の喜ぶものをあげたらねえ。。。そうだ！」

みどりさんは、ポンつと手をたたくと、かごを持って、町の手芸屋さんへ走っていきました。そして、二日、三日、夜もおしんでチクチクとなにかを縫っていました。

「さあ、できたわよ！」

その日のお昼はごちそうでした。テーブルのまんなかの、大きな丸いお皿には、みどりさん特製のちらしずしがのっています。甘く煮たかんぴょうやれんこんに、桜色のでんぶと黄色の錦糸卵がきれいにかざられて、ブラウンさんの大好きなサーモンのおさしみといくらものっていました。汁物はハマグリのおすましです。それに、ちよつと早いけれどいちごもありました。ダイニングにつれてこられた女の子は、目がまんまるです。

「今日はひなまつりですもの！女の子のお祝いなのよ。」

みどりさんがウインクしました。

「それでね、今日はね、あなたにプレゼントがあるのよ。」

みどりさんは、背中にかくしていたものをさつと取り出して、女の子に見せました。

それは、クマのぬいぐるみでした。金色の毛並みで、くびには赤とみどりのチェックのリボンをしていて、おめめは黒くてまんまるで、みみの中とあしのうらはオレンジ色でした。

「.....!!!!!!」

女の子は、いきをするのを忘れたかのようにクマを見ています。

「はい、これ、あなたのよ。」

みどりさんが手にだかせてあげると、もつとびっくりした顔をして、それから、ぎゅーとだきしめて、ポロポロなみだをながしました。なんにも言わなくても、とつてもうれしかったことがわかります。

「さあ、食べましょうね。」

いすに座らせてもらって、クマをだいたまま、女の子はとりわけてもらったちらしずしをひとくち食べました。

「.....おごし」

びっくりしたブラウンさんは、おもわずお箸を落としてしまいました。

「いま、なんていったの？」

女の子は、くちをもぐもぐさせて、もういつかい言いました。

「おいしー!!」





「最初にしゃべった言葉が「おいしい」だなんて、食いしん坊のあたらしいよね！」
ブラウンさんの話をずっと聞いていたよしみちゃんは、泣きながら笑っています。そ
して、レモンパイの最後のひとくちをぱくつと食べました。
「あたし、あれからよくしゃべるようになったよね。朝から晩までブラウンさんとみ
どりさんにくつついて、ずーつとおしゃべりしてた気がする。」
「あなたがうちにいたのは二年くらいだったけど、ほんつとうに楽しかったわねえ。」
みどりさんが、ブラウンさんに紅茶のおかわりをつぎながら言いました。

そうなんです。よしみちゃんがブラウンしんりようじよにすんでいたのは、二年くらいでした。そのあと、よしみちゃんは、ブラウンさんの友人のピリポ神父が校長先生の「聖アンデレ学園」という学校に九年間通いました。聖アンデレ学園には、遠くからきた生徒や身寄りのない生徒もいたので、ピリポ神父は学校の隣に寄宿舎をつくって、生徒があんしんして暮らせるようにしたのでした。よしみちゃんはそこで、シスターマーガレットという、ちよつときびしいけれどユーモアがあつて生徒たちをこころから愛しているシスターと、田中さんという、お料理やお洗濯をしてくれる、お母さんのようなあたたかい人、そして、寄宿舎学校の庭に色とりどりの花を咲かせて、校長先生から「みどりの指の持ち主」とよばれているシゲタニさん、いろいろな国からきたシスターの先生たち、そして、元気なおてんば娘たちと少女時代をすごしたのでした。なかでも、よしみちゃんと、親友のトモエ、ミカは、聖アンデレの「おてんばトリオ」として有名で、たくさんのいたずら記録や伝説をのこしました。（このトリオの冒険については、いつかまた、みなさんにおはなしする機会があると思いますよ）。

よしみちゃんが、そんな小さいうちから寄宿舎学校だなんて！とびっくりしましたか？でも、聖アンデレ学園は花園町の「花電」（ほんとうの名前は、花園公電線）にのつて一時間、そして、もつと大きなシーライナーにのつて一時間でつくんです。ですから、よしみちゃんは、週末にはよくおともだちもつれてしよつちゆうブラウンさんのおうちに泊まっていましたし、花園町の人たちともすっかり仲良しになりました。寄宿舎にすむのは、よしみちゃんがじぶんできめたことでした。ピリポ神父から、しんりようじよからでも通えるし、寄宿舎にもすすめるといふ話を聞いたとき、よしみちゃんは考えました。そして、その寄宿舎をみてみたいといつたんです。シスターマーガレットに手をひかれながら、「友愛寮」（寄宿舎に校長先生がつけた名前です）をみて、お花がいつぱいの庭や、2人部屋からみえる海の景色や、みんなで共有でつかうダイニングルームにおかれたピアノや卓球台、そして、いいにおいのするキッチン（田中さんが、蒸したての手作りあんまんをひとつくれました）を見て、そして、最後に、もう入寮を決めていた栗色の髪をした女の子に、「あたし、ミカよ。いっしょにあそぼうね」っておりがみで真っ赤なチューリップをもらって、。それから、よしみちゃんは、自分で校長先生に言いました。「あたし、ここにすみませう」って。「よしみちゃん、ほんとにほんと？診療所からかよつたってほんとーにいいのよ。」って、みどりさんが後から言ったときも、よしみちゃんはいったのです。

「あたし、あそこがすき！もうきめたの。」

よしみちゃんは、ほんとうに勇気のある子で、冒険が大好きだからだつて、ブラウンさんはとてもほこりに思ってくれましたが、ちよつぴり、あんまんにつられたのかもなあってよしみちゃんは思っています。（田中さんのあんまんと食べたことがありますか？あんなにおいしいものは世界中どこにもないですよ！）

ところで、よしみちゃんが、どうしてよしみちゃんになったのか、まだ話していませんでした。そして、どうしてよしみちゃんが洞穴に住むことになったのかも。

3 洞穴の子が「よしみちゃん」になったわけ

それは、よしみちゃんがブラウン診療所にきて、三か月ほど、ちょうど春が終わり、さわやかな新芽の黄緑の頃でした。ブラウンさんは、よしみちゃんが話せるようになってから、毎日じつくり、じつくりよしみちゃんの話に耳を傾けてきて、いろいろなことがわかってきていました。花園警察のノブさんも、毎日のお仕事のかたわら、ずっと調べてきていて、「洞穴の子」の謎が、少しずつとけようとしていたのです。

まず、よしみちゃんの話から、そして、お医者さんであるブラウンさんの観察からも、よしみちゃんが「ネグレクト」を受けていたことは間違いないことでした。ネグレクトっていうのは、ちよっと難しい言葉です。子どもは、どこの国で生まれても、ごはんや、あたたかいお布団を用意してもらって、優しい言葉をかけてもらって、愛される「ケンリ」がある。そして、子どもの周りにいる大人には、そうする「ヤクメ」があります。でも、よしみちゃんの周りにいた大人は、その大切なヤクメを果たしませんでした。それを、難しい言葉でいうと「ネグレクト」というんです。よしみちゃんの場合、それどころか、ウソを言っておどしたり、言うことを聞かないと閉じ込めたり、一番悪かったのは、あるとき、よしみちゃんを、罰として洞穴に閉じ込めて、少しのパンと水だけをのこして、そのままどこかへ行ってしまったことでした。ブラウンさん夫妻に発見されていなければ、よしみちゃんは、命も危なかったのです。

ブラウンさんからその話を聞いたノブさんは、「火をふいたドラゴンのように」(これは、ずーっと後からブラウンさんが教えてくれたことです)怒りました。

「そんなことは人間のすることじゃない！あんなちいさな子にそんなことをして、しかも逃げるだなんて、わしは、ぜったいに、許さんぞ！」

その日からノブさんは、ほとんど毎日のように、自分か部下を送って、洞穴のあたりを張り込みました。そしてある日、ついに、洞穴にはいるうとしていた怪しい人物を捕まえたのです。そして、警察署で何日も、粘り強く尋問したのです。

驚いたことに、ノブさんの予想に反して、その人物は、よしみちゃんのおばあさんでした。自分の実の孫にどうしてそんなひどいことができたのか、ノブさんも、みどりさんも、心が張り裂けそうでした。ブラウンさんは、お医者さんなので、そして、精神科医という、体だけでなく、心や頭の病気の専門家でもあるので、このようなことが残念ながら起きることがあることを知っていました。ブラウンさんは、その人(おばあさん)といっても、その人はみどりさんと変わらないくらいにまだ若いのです)に警察署まで面会にも行きました。そうして分かったことは、よしみちゃんのお母さんは、若くしてよしみちゃんを産んだ後、体をこわし、亡くなっていたこと。そして、そのお母さんの母親であるその人は、心が病気で、人を愛することができない人だったということ。おまけにその人は、自分の娘が死んだのが、よしみちゃんのせいだと思ひ込み、ましてや孫は男の子が良いと思っていたので、ますますよしみちゃんをいじめたのです。お父さんについては、何もわかりませんでした。

「あの子には、本当のことを伝えないといけない。ちいさくても、かしこい子だからきつといろんなことが分かっているだろうし……。それに、人間は、どんなに

つらくても、本当のことを知ることから、癒しと自由がはじまるんだ。」

ブラウンさんは、自分に言い聞かせました。

「ブラウンさんや、わしにも手伝わせておくれ。あの子を助けるのは、わたたちみんなの役目だ。あんただけに責任を負わせやしないよ」

ノブさんは、ブラウンさんにそういうと、ピツと背筋を伸ばしました。そして、二人でよしみちゃんに、その人が見つかったことを話に行ったのです。

よしみちゃんは、みどりさんからお花の鉢植えを一つもらって、一生懸命水やりをしているところでした。

「・・・あのね、あなたをひどい目にあわせた人は、つかまったよ。」
よしみちゃんは、ビクツとしてじっとしています。

「その人は、とつても悪いことをしたから、ツミをつぐなわなないといけないんだ。だから、ここにいろノブさんがね、つかまえてくれたよ。そしてね、あの人が、あなたにあんなにひどいことをしたのは、あなたが悪かったからじゃないんだよ。ところが、病気だったんだ。わかるかな？」

「ほんとうに、もうこない？ つれもどしにきたりしない？」

よしみちゃんは、不安そうに聞きました。いつのまにかそばにきたみどりさんがぎゅつと肩を抱き寄せています。ノブさんが、口を開きました。

「大丈夫だ。もう絶対に君を怖い目にあわせたりはせん。花園町の人みんなで、君を絶対に守る！」

ノブさんの太くてガラガラな声は、ちよつとこわいけど、でも、とつてもまつすぐでした。そして、もう大きなおじさんなのに、その目には、なみだがいっぱいたまっていました。

ブラウンさんは、よしみちゃんの目をじっと見つめて、こう言いました。

「あの人はもう二度と、あなたの前にあわられることはできないよ。それにね、あなたのことを大切におもっている人がたくさんいるのは、この町だけじゃない。いつか、あなたが大きくなつて、いろんな町に行つて、もしかしたら海もこえて、たくさんの人に出会えよう。覚えててほしいんだ。この、ノブさんのように、私やみどりさんのように、あなたのことが大好きで、そして、おなじ人間としてつながれる、いい人たちが、たくさんいるんだよ。世の中には、残念ながら、悪い人たちもいる。家族でさえ、傷つけてしまう人もいる。でもね、いい人、愛することが出来る人たちは、海の砂の数ほど、多いんだよ。

あなたは、ふかく、ふかく、傷ついてしまっただろう。だけど、わたしには、君がとつても勇敢な子だということがわかる。そして、あたたかい心をもった子だということも。あなたは幸せになる。そして、この世界は良いものであることを知るようになるよ。」

いつの間にか、ブラウンさんは、ちいさい女の子に話しているのを忘れていました。そのくらい、よしみちゃんの目が真剣だったのです。まるで、その瞬間、ブラウンさん、みどりさん、ノブさんだけではなくて、もっと大きな存在が、その場に居合わせ、ブラウンさんを通してよしみちゃんの魂に語りかけているような、そんな不思議な感覚でした。とても厳粛で、特別な瞬間でした。

さんやノブさん、みどりさんから発せられる、なんだか、とても強くて熱いものが、うまれて初めて自分のこころに向けられている気がしました。(そのとても強くて熱いものを、*「愛」*というのだということ、よしみちゃんは大きくなってから知りました)。なんだかよく分からないけれど、自分の心の奥の奥がふるえるような、とても大きな存在に抱きしめられたような気持ちでした。

よしみちゃんに名前がついたのは、それからすぐのことでした。実は、よしみちゃんには、亡くなったお母さんがつけた名前があったようなのですが、おばあさんにあたるその人は一度も名前でもよしみちゃんを呼ばなかったもので、名前がわかりませんでした。役所にも届がでていなかったのです、記録もなかったのです。それで、ブラウンさんたちは、*「きみ」*とか、英語で大好きな人を呼ぶときにつかう、*My dear, Honey*と呼んできたのですが、そろそろ名前を決めた方が良いとブラウン夫妻は考えていました。でも、名前というのは、親でさえ、悩んで悩んでつけるもの、その人が一生呼ばれる大切なものです。一体どうやって決めたらよいか・・・と考えたブラウンさんは、長年の友人で、互いによく相談しあっているピリポ神父に相談することにしたのです。

ピリポ神父は、さつそく診療所を訪ねてきてくれました。ピリポ神父は、サンタクロースのように真っ白なおひげと、さくらんぼのように真っ赤なほっぺの持ち主で、ブラウンさんと違って、ふとついで、眼鏡はかけていません。お客さんが来たと聞いて玄関まで駆けていったよしみちゃんは、ひとめでこの人が好きになりました。ピリポ神父は、よしみちゃんが大切に抱えていたクマのぬいぐるみを見て、にこつと笑いました。

「こんにちは。とても素敵なクマさんですね。クマを愛しているわたしの国でも、それほどかっこいい顔をしたクマさんには、なかなか出会えませんが。」

よしみちゃんは、すぐにじぶんの大切な宝物のことをわかってもらえたことがうれしくて、

「この子、とってもいい子よ！」とピリポ神父の前に、みどりさんが丹精こめてつくってくれたクマを差し出しました。神父は、そつとクマさんの頭をなでました。

「ほんとに、いい子ですね。あなたのように。この子はなんていう名前ですか？」
「えーっと・・・。」

よしみちゃんは、考えています。ピリポ神父は、そつとよしみちゃんの頭をなでると、こう言いました。

「このクマくんに、いい名前をつけてあげてください。わたしも、あなたに、いい名前、かんがえますからね。いい子には、ぴったりの名前、必要です。」

側で見守っていたブラウン夫妻は、はつとして、互いに顔を見合わせました。よしみちゃんは、真剣な顔をして、クマさんを抱えたまま、お庭の方に走っていきました。

「さてさて、あの子が考えている間に、わたしたちも、考えましようね。おつと、忘れるところだった。これは、おみやげです。みどりさんのおいしい紅茶と一緒にたべましようね。」

ピリポ神父が差し出した包みを開けると、中から大きな葡萄が一房でてきました。春の若草のように明るい黄緑の粒が、まるで宝石のように光っています。

「まあ、シャインマスカット！」みどりさんがうれしい悲鳴をあげました。

「ジョン（ブラウンさんの名前です。ピリポ神父はいつもこう呼びます）から、あの子のことで電話をもらったすぐあとに、ご近所の方からいただいたんですよ。美しいでしょう？」

「これは・・・？」

葡萄の下に差し込んであった、美しいしおりを取り出して、ブラウンさんがたずねました。

「それは、うちの職員の田中さんがつくってくださいましたしおりです。この葡萄にぴったりでしょう？さしあげます。」

紫とピンクの押し花、そして、ラベンダー色のリボンで飾られたそのしおりの裏側には、美しい字で、聖書の句が書かれていました。

『わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。（ヨハネによる福音書十五章五節）』

「豊かに実を結ぶ・・・実を・・・」
ブラウンさんは、はっとして言いました。

「そうだ！あの子の名前に、このみ言葉を使うのは？」

「実を結ぶだから、実結ちゃんかしら？ピリポ神父はどう思います？」

みどりさんが尋ねると、神父は、じつと目をとじて、しばらく考えてから、こう言いました。

「わたしも考えていました。なぜ、神様は、あのちいさな女の子、あんなひどい苦しみにあった子、ここに導いたのでしょうか。あの子、だれにも愛されませんでした。でも、あの子つくったの、人間ではない。神様がまずつくりましたね。聖書に、あります。神は、お造りになった人間をみられたとき、Very Good といわれて喜ばれた。あの子は、神の目には、Very Good な存在です。そのように、私たちはあつかうようにと、いわれています。」

みどりさんは、涙をふいて、うなずきました。

「そうね、その通りだわ。私たちの目にも、あの子はとってもいい子です。」

「みどりさん、日本語で Good の漢字は？」

ふいに、ブラウンさんがたずねました。

「良いっていう漢字かしら、ほら、こう書くのよ」

みどりさんが紙に書いてみせると、ブラウンさんは、しばらく考えてから、その字の下に、「実」と書きました。

「良実・・・よしみ？よしみちゃんね！素晴らしいわ！」

みどりさんが思わず手をたたくと、ピリポ神父が葡萄の実をつまんで、にっこり笑って言いました。

「さあ、名前がきまりましたから、この良い実をみなさんでいただきますでしょう。」

そんな訳で、おいしい葡萄がきっかけで、洞穴に住んでいた女の子から、晴れて「良実」という名前をもらったよしみちゃんは、自分の名前をたいそう気に入って、みどりさんに教えてもらって、大きな紙に百回以上自分の名前を書いて練習しました。(みどりさんとおんなじ「み」だ！ってよしみちゃんは、喜んだんですよ。)そして、ノブさんにも報告に行つて、ノブさんは泣いて喜び、それ以来、葡萄の季節になると、いつもよしみちゃんにと、葡萄を差し入れてくれるようになったのです。クマくんの名前はどうかたつたかって？クマさんも、りっぱな名前をもらいましたよ。よしみちゃんが大好きなお花、ユキヤナギ(よしみちゃんは、ブラウン診療所のお庭にあるお花の名前をぜんぶ、みどりさんに聞いて覚えまして)からとって、「ユキ・ブラウン」と名付けられました。

「それにしても、あれからもう十年もたつて、あなたがこんなに素敵に成長するなんて・・・」

みどりさんは、おかわりの紅茶をよしみちゃんとブラウンさんに注ぎながら、もう何度目かのうれし涙をこぼしました。

「そして、よしみちゃんが、いよいよ夢にむかつて旅立つなんてね！」
ブラウンさんが、よしみちゃんにウインクをしました。

そう、実は、よしみちゃんは、聖アンデレ学園を卒業した後、高校には進学せず、夢のために、大好きなケーキ屋さんでアルバイトをしてお金を貯めてきたのです。

「ほんと、さくらさんに感謝してる！向こうに行ったらうんとお手伝いをして、勉強もがんばって、たくさん友達つくるんだから！」

よしみちゃんは、もう3切れ目のレモンパイをぱくつきながら言いました。

「さくらさん」というのは、ブラウン夫妻のひとり娘です。アメリカに留学したのがきっかけでご主人と出会い、今はサンドイッチやお惣菜を売る小さなお店を開きながら、子どもたちを育てています。よしみちゃんは、ずっと、海外に行きたい夢がありました。さくらさんの紹介で、地元の高校に奨学金で留学できることになり、さくらさんのお家にホームステイをして、お店を手伝いながら、勉強ができることになったのです。

「それにしても、大好きな英語と、そして、大好きなお料理をどっちも学べるなんて、あたしってほんとにラッキー！神さまありがとう！」

よしみちゃんの笑顔を見ながら、みどりさんはまた泣いて、笑いました。そんなみどりさんを見て、ブラウンさんも、眼鏡がくもってしまいました。不思議です。うれしいのに、涙がでてくる、甘くてしょっぱい、おいしい、おいしいお茶の時間となりました。

「よし、そろそろ、あたし、行くね！」

よしみちゃんは、赤い自転車にぴよんつと飛び乗って、ブラウンさん夫妻に手をふるのと、ペダルをぐーんと漕ぎました。アパートに帰る前に、もう一度、海を見に行くつ

もりです。さくらさんの住むアメリカの街から、海は車でドライブしないと行けない
そうなので、今のうちに、大好きな花園の海をたくさん見ておきたいのです。

海岸につくと、自転車をとめて、靴をぬいで、裸足で砂浜を歩きました。海が一番
きれいに見えるお気に入りのスポットまで歩くと、よしみちゃんは、ジーンズのポケ
ットから、手紙を取り出しました。アメリカに留学することが決まったときに、ピリ
ポ神父がくれた、宝物の手紙です。青い便せんに、三枚ぎっしりと、いつもの万年筆
で、英語で書かれた手紙でした。よしみちゃんはもう、その手紙を暗記するくらい読
んできましたが、また、お気に入りの最後の箇所を開いて、声にだして読みました。

My dearest daughter and friend, Yoshimi,

*Always remember that you are a child of heavenly Father and to Him, you are
Very Good. Let me give you this verse in Bible to end my letter – On those who
have accepted him, however, he has conferred the right of being children of God,
that is, on those who believe in his Name, who owe this birth of theirs to God, not
to human blood, nor to any impulse of the flesh or of man. John 1:12-13*

*Live, Love, and Enjoy life which is a loving gift from our Father for you to open.
Remember you have Hanazono people here who would run up to you any time
because we love you and you are precious to all of us.*

(親愛なる娘、そして友である良実よ、

あなたが、天の父なる神様の娘であり、父なる神様の目に、あなたは、とても良いと
いうことを、いつも覚えていてください。この手紙の結びに、聖書のみ言葉を贈りま
す。「しかし、言は、自分を受け入れた人、その名を信じる人々には神の子となる資
格を与えた。この人々は、血によつてではなく、肉の欲によつてでもなく、神によつ
て生まれたのである(ヨハネによる福音書一章十二・十三節)」

生きなさい、愛しなさい、天の父が、あなたが開けるようにと贈ってくださったプ
レゼントである人生を、楽しみなさい。そして、この花園には、あなたのもとへいつ
でも駆けつけるつものある人々がいることを、忘れないで。なぜなら、私たちは、
あなたを愛していて、あなたは、私たちにとって大切だからです。)

よしみちゃんは、しばらくじっと海を見つめていました。目をつむると、大好きな
人たちの顔が浮かんできます。

「あたしはもう、ひとりじゃない」

そうつぶやくと、よしみちゃんは、歩き出しました。よしみちゃんの足跡が、ひとつ、
ふたつ、みつつ、よつつ、真つ白な砂浜に、ついていきます。それはまるで、誰にも
読まれたことがない物語に、ストーリーが書かれていくようでした。そして、その物
語は、まだ、始まったばかりなのです。【完】